

平成18年度学力向上推進に関する合同研究発表会シンポジウムの概要

テーマ：「これからの教育研究。授業改善の在り方」

奥課長（課題提起）

1 様々な調査結果を、授業改善に生かすこと

基礎・基本」定着状況調査の報告書を授業改善に生かす。通過率が高くなっている学校は、授業の中に具体的なめあてを示し、問題解決的な学習を積極的に組み入れている。

また、調査結果からは先生方と子どもたちの意識のずれが見られる。指導したと思っていても子どもたちはそう思っていない。たとえば家庭学習の具体的なやり方など、きめ細かな指導をすることが大切である。

2 授業力を高める風土作り

学校は組織としての力を問われており、とりわけ若い先生が先輩に学んでいくとか、また、先輩の先生が若い人からエネルギーをもらって学んでいくといった風土を、学校の中に作っていくことが一番大切なことである。

3 研究主題を明確にしていくこと

テーマが抽象的であるため、学校全体で取り組むパワーが出にくい、具体的に何をすればよいかわかりにくいものがある。また、研修では、参加型の研修を積極的に取り入れる必要がある。それぞれの先生方が知恵を出せる参加型の研修にすることが大事である。

渡部先生

研究推進の方法について

1 目の前の生徒の課題は何であることを明確にし、課題の克服をめざすこと。

学校は目の前の子どもを育てることにある。確かな学力、豊かな心、健やかな体についての研究を全部やっていたらエネルギーが足りない。ポイントを絞る。そのためには目の前の子どもの課題を明確にする。

2 全教科で取り組みをすすめていく。ポイントは5つある。

① 本校はパイロット校であるが、パイロット教員だけが「ことばの教育」を知っていたのではだめである。

② 全教科で言語技術の活用を実践していくこと。

③ ことばといえば国語がやればよいというのではない。しかし、国語科が他の教科と横並びになってはいけない。国語科はことばの教育に一番精通する重い教科である。

④ 2年間の研究指定なので、2年間の研究構想でやらなければいけない。

1年目に言語技術の習得を、2年目に身に付けた言語技術で教科学力を向上させる。

⑤ 教師自身も、言語技術を身に付け活用しなければならない。

これらを、授業改善にいかに関わりつけるかということについては、3点ある。

i 教師が分かりやすく説明するよう、言語技術を活用する。

ii 教科目標を達成するために言語技術を活用する。言語技術はあくまで手段。

iii 発表プラカードというものを活用して、全部の授業で講義型の授業から意見交流型の授業へ変換し、思考を深め、言語技術を活用した発表力を付ける。どの教科でも共通して活用できるような方法を、学校で1つでいいから見つける。

平田校長

2つのキーワード。

① 研修は楽しくなければならない。 ② 研究主任はまさに研究のスイミーである。

研究授業は全員がやる。授業の終わりに必ず他の教員が評言をする。教員が授業をいかにみて、クラスをどうつかみ、子どもたちにどう返すか。言語技術が問われる役割。また、全教職員が評価のことばを書いたものと写真係が写真をとったものを一覧表にして教室にプレゼントする。子どもたちがそれを見る。全員が研修に関わり、どういう授業であったかをまとめることにもなる。

研究協議会について。当日の席はわからない。歳末大売出しのガラガラや、時には血液型などで3つのグループに分かれる。研究主任が秘密にしているので、どういう席がわからない。全員発言が原則。はじめに少人数のグループになる。マッピングコミュニケーションをしたり、フリートークをしたり。そのあと、グループの代表3人で研修の柱に基づきパネルディスカッションをやる。代表は順番として自然に全員発表していくことになる。

「今日の授業を一言で評価するとどうのことばになるか」をキーワードで行う。研究協議は、よく勉強している人が発表するというのではなく、みんなが発表することが大切。そういうことを通して、言語技術等が身に

ついていく。研究協議会には記録係があり、ホワイトボードに同時進行で上手に書いていき、研究協議会が終わったときにすばらしい記録が残る。また、その他の研修として教育技術の研修会もやっている。発問、ノート資料、課題設定など。初任者を励ます会も今年度はやった。

和田先生

本校の研究推進のキーワードは、「体験」と「ことば」。

「体験」と「ことば」の双方向の繰り返しで、理解が深まり、数学的な考えが育成されるのではないかとこの研究を進めている。こだわっているのが、算数ノート。これまで「とにかく何でも書かせる」レベルで、子どもたちにとっては何を書いたらいいのか、疑問の算数ノートだった。それから全教職員の共通理解のもとにノートモデルを作り、算数ノートを書き言葉の総称とし、「記録」から「活用」へとつなげていく。考える力を育てるために、活動を通して問題を理解する。そして、ポートフォリオとして整理する。図や表、いろいろな活動を自分のスタイルに直してノートに書いていく。問題をどのように解いていったのか、結論先行・ナンバリング等の言語技術を用いながら交流する。説明の際には、低学年は自分が行った事実を述べる、中学年は自分の思考の課程を述べることができる、さらに高学年は既習の学習と関わらせて書くことができる、というように発達段階を考慮している。

その結果、学校や教員がどのように変わったか。

1 学校の変容について

- ① 校内における研修の活性化…全教職員の新しい研修スタイルへの挑戦、プレゼンテーション能力の向上。
- ② 授業提案者だけでなく全教職員が個々の課題として授業改善に生かす…研究主題に沿った実践となり、ベクトルを一つにでき、しかも太くなってきた。（「牽引型」から「駆動型」へ）

2 児童の学力向上に関して

単元末テストにおける「数学的な考え方」が向上している。「基礎・基本」定着状況調査をみても、年度による通過率の振幅が狭くなり安定をめざせるようになってきた。

3 教師の変容

口南スタイルが定着し、教師自身のことばの力の向上が見られる。

角屋教授：4名の先生方にいろいろ御提案していただいた。会場の方から、御質問、御意見をいただきたい。

質問1

高めあうグループを作るということと参加型の研修は関係が深いように思う。平岩小の研究推進体制をもう少し具体的に説明してほしい。

平田校長

研究部は全員が入っている。その中にはそれぞれ1人ずつスイミーが入っている。研究部は、年間計画を立てたり、中身（写真係、板書係、評言係など）づくり。実践交流部は研究授業後に先生が評言したものをまとめたリ、写真にとって整理する。教材開発部は、教材研究という特に大切な部分である。研修3部会は1ヶ月に1回ぐらいであるが、随時やっている場合もある。スイミーがいて、赤い魚たちがいないと研修は進まない。組織的に動くことが大切である。

質問2

研究主任と教務主任の連携をどのようにとればよいか。

渡部先生

組織的にというのはことばとしては簡単であるが、チームとして考えるということである。それぞれ役割分担があつて、得意科目や得意分野、領域がある。そこをうまくやる。全部が全部、同じことを平等にやることは、必ずしもうまくいかない。

1 校長のビジョン具現化のためのトロイカ体制

教頭先生と研究主任と教務主任の3人のトロイカ体制をつくる。本校の場合、教頭先生が絶えず隣にいますので、相談ができ、非常に効率的である。絶えずハウレンソウである。詰まったときに相談する。教頭先生は非常に頼りになる存在である。研究主任は、TTでいっしょに授業に出ている。同じ生徒を目の前にしてやるので、課題が一緒である。「次どうしようか」という話になるので、研究主任とは毎日意見交流をする。全ての研究を研究主任に任せきりにはしない。教務主任として全体を把握する必要がある。また、得意分野があるの

で、弱点をフォローしあって共にすすめる。人材育成の視点でも仕事分担をする。

2 求められているところに、どうやって上り詰めるか

校長先生からビジョンを言われる。例えば10の課題をもらうと、いかに10上り詰めるか計画を立て、タイミングよく組織全体に下ろしていく。

3 お願いと人間関係作り

頭を下げて「お願いします」。負担がかからないように、雛形を作って出す。やってもらったらどんな些細なことでも「ありがとうございました。」

和田先生

教務主任と研究主任の役割を考えたとき、以前は、どこまでが教務主任の範疇で、どこからが研究主任か棲み分けが難しいという印象を受けた。しかし組織で動くことが大前提で、教務主任は教頭の指導・助言を受け、校長の経営理念のもとに「戦略」を立て、研究主任は「何を、誰が、いつまでに行う」という具体的な「戦術」を立て、連携して研究を推進している。

研究推進の1つのキーワードは「おかげさま」。あなたがいるから研修ができる。あの子がいるから私たちは課題を見つけることができる。

角屋教授：二人の共通点として、目標を必ず1つにすること、人間関係作りをすること。

奥課長

学校の目標というものと研究のテーマというものを、具体的なものにしないと本物にならない。研究は研究、学校目標は学校目標ではなかなかうまくいかない。人間関係作りという話があったが、子どもに確かな力をつけるということは、お互い高め合い、教務主任は教務主任の知恵を、研究主任は研修主任としての知恵を出すようにすること。

平田校長

校務3部会というのがあって、研究主任は校務部に入っている。教務主任はまさに教育課程のスイミーであるが、本校は全員がスイミーにならなければならない。2年目の教員も避難訓練や緑化では彼女がスイミーである。全員がスイミー、全員が赤い魚、それが教員の人間力を作っていく大切なところ。それが組織力を高めて学校力を高めていくことにつながる。

角屋先生（まとめ）

学力に関するものと学力に関しないもの（学力を取り巻くもの）、学力は子どもに関するものと教師に関するものがある。

1 学力の子どもに関するもの

梶田先生の話から、これからの学習指導要領では、確かな学力ということがあった。

① ドリルとか反復が大事

子どもたちに繰り返すことで耐えることを、繰り返すを楽しみにするような、繰り返しの方法を編み出してほしい。自分で目標をつけながら、楽しみにするような方法。尾道の長江小学校が、そういったドリルを活用していた。

② 活用すること

能力を意識する。問題解決型の授業が非常に重要である。問題を繰り返しながら、解決する喜びを味わうような取り組みで、学力が高まる。

2 学力の教師側に関するもの

① 学校全体が組織としてまとまる。② 学力をつける授業をする。

シラバスが有効に働いていない。シラバスを有効に再利用して、あるいはバージョンアップして使う。言語技術に着目する。若い先生が頻繁に使うことば「わーすごい」・・・何がすごいのか？

3 学力を取り巻くもの

キャリア教育、学力のほかに必要なものとして、自分が一体、何になりたいのか。それを答えるのがキャリア教育。キャリア教育を充実させてほしい。

本日の研究会で発表された内容は、いずれも学習指導要領の改訂に備えうるものである。自信をもって研究を進めていただきたい。